

レーニン図書館の思い出

大矢 温(外国語学部ロシア語学科教授)

私が最初にレーニン図書館を訪れたのは1989年の夏のことだったから、かれこれ15年来の付き合い、ということになる。実はレーニン図書館といっても、1992年に改称されて、正式にはロシア国立図書館というのだが、今でも地下鉄の駅は「レーニン図書館」というし、一般にも「レーニン図書館」といった方がよく通じる。初登録時に私は一介の大学院生にすぎなかったのだが、外国人ということで特別に「赤い利用証」で登録してもらった。これには今でも感謝している。というのも、このような好意がなければ、この怪物のような図書館を使いこなすことなどとても不可能なことなのだ。

なにしろ、規模が膨大だ。収蔵されているコレクションは247カ国語にわたりその総数は4,300万点にのぼる。本と雑誌だけでも2,900万点。ざっと見積もって、札幌大学の図書館50個分というところか。とにかく膨大な数だ。ちなみにこの規模に匹敵するのは中国国家図書館の2,311万冊ぐらいではなかろうか。日本の国立国会図書館(769万冊)はいうにおよばず、米国議会図書館(1,830万冊)やフランス国立図書館(1,383万冊)をも遙かに凌駕しているのだ。この想像を絶する膨大な蔵書の中から必要な資料を発見し、請求し、必要ならコピーをとって日本に持ち帰らなければならないのだ。しかも親切な手引き書のたぐいはない。

しかも原則閉架式だ。つまり、札幌大学図書館のように気軽に本棚から資料を取り出せるのではなくて、延々と続く蔵書カタログの棚の中から必要な資料のカードを探し出し、そこに記されている請求番号で請求し、しかる時間にしかる場所でその資料を受け取らなければならないわけだ。しかも分類目録の分類方法は日本とは別物で、日本の常識は通用しない。資料にたどり着くまでに一苦労だ。さらにその資料をコピーするとなると、特にソ連崩壊前後の混乱期には、ほとんど苦行僧のような労力と忍耐力が必要だった。コピーもすべて注文方式だったから、朝から注文用紙に資料の現物を添えて注文のためにも、また、指定された時間に完成したコピーを受け取るためにも、それぞれ最低1時間は行列に並ばなければならなかった。それだけではない。コピーを受け取るためにはあらかじめ料金を支払わなければならないから、ここでも小一時間の行列だ。しかも1日に許可されるページ数は1人10ペ



ージまで。とても研究どころではない、というのは表向きの話。実際には「赤い利用証」のおかげで、書名や著者名などの書誌データさえしっかりしていれば請求番号を書かなくても資料を出してくれるし、コピーの枚数制限も緩和された(後に枚数制限自体が撤廃された)。そんなわけで留学中にもほとんど不便を感じることはなかった。

なんといってもレーニン図書館には、強制納本制度によって、ロシア国内で出版されたすべての刊行物が収納されている。つまり、ロシア・ソ連国内で出版された印刷物はすべてここに来れば見られる、というわけだ(もちろんそれはロシアのこと、例外はあまたある)。この安心感はほかの図書館ではまず味わえない。幾多の困難をも顧みずにあえてレーニン図書館に通い続ける意味だ。ただし、このレーニン図書館、ここ数年は大規模な修理を行っていてほとんど麻痺状態だ。一日も早い復旧が望まれる。